

虚妄分別という複合語に対する二つの解釈

金 俊 佑

〔抄 録〕

本稿では虚妄分別という複合語の構造を知り得る文献資料を紹介し、その資料の分析に基づいて、虚妄分別には二つの表現様式があるということと、その複合語の解釈においても二つの傾向があるということを述べる。まず、表現様式に関しては、MAV と MSA とにおいて虚妄分別は *abhūtaparikalpa* として表記されているが、その同じ意味の虚妄分別が VS においては *vitathavikalpa* として表記されている。次に、複合語の解釈に関しては、MAV での虚妄分別が註釈書において格限定複合語として解釈されている反面、MSA と VS とでの虚妄分別は同格限定複合語として理解され註釈されている。このようなことから、虚妄分別という複合語には二つの表現様式と、二つの解釈傾向があるということが結論として導き出される。

キーワード 虚妄分別 複合語 安慧 *abhūtaparikalpa* *vitathavikalpa*

1. 序論

日本の学界において虚妄分別 (*abhūtaparikalpa*) は一般的に「虚妄なる分別」と理解されている。このように虚妄分別を「虚妄なる分別」と理解することは虚妄 (*abhūta*) と分別 (*parikalpa*) とから構成されている虚妄分別を前者が後者を形容詞として修飾する、或は、両者を同一のものと見なす同格関係の同格限定複合語 (*karmadhāraya*) として見ていることを意味する。

このように虚妄分別を同格限定複合語として理解するのは長尾雅人 (1907 - 2005) に代表される⁽¹⁾。氏はそれを裏付ける主な根拠として 1) 識、即ち、虚妄分別によって現れる対象が実在しない虚妄なものであるからということと、2) 依他起的な存在である虚妄分別は、円成実性に比べたら虚妄なものであるからということとを挙げている⁽²⁾。しかし虚妄分別が同格限定複合語だということが直接的に記述されている文献資料を根拠として提示しているのではない。

これに反して、西洋の研究成果では虚妄分別を格限定複合語 (*tatpuruṣa*) として理解する傾向が見つけられる。Th. Stcherbatsky は虚妄 (*abhūta*) が「非存在 (*unexistent*)」ではなく「非真実 (*unreal*)」を意味するということに注目して、それを現象的様子 (*phenomenal*

appearance) と理解する。そして分別 (parikalpa) を、分別されたもの (parikalpita) と区別して、造り出すものとして理解する。最終的に、この虚妄分別を「real creator of the unreal」、「Reality which creates Appearance」として理解し、「The Universal Constructor of phenomena」と訳する⁽³⁾。また、Mario D'Amato は虚妄分別を「unreal imagination」と訳するが、これが「imagination」が「unreal」であるということを意味するのではなく、「unreal」なるものを「imagine」するということを意味するのであると述べている。そしてこのような理解の根拠として安慧の註釈を言及している⁽⁴⁾。

本稿では虚妄分別という複合語の構造を説明する文献資料を紹介する。そしてその資料の分析に基づいて、虚妄分別には二つの表現様式があるということと、その複合語の解釈において二つの傾向があるということを結論として述べる。

2. 格限定複合語 (tatpuruṣa) としての虚妄分別

虚妄分別という用語は大乘經典においても見られる概念であるが⁽⁵⁾、それが特殊な意味を持つ概念として本格的に使われたのは彌勒系の論書からである。その中でも *Madhyāntavibhāga-kārikā* (MAV) では虚妄分別が具体的に論述されている。ここでは、その註釈書である *Madhyāntavibhāgabhāṣya* (MAVBh) とそれに対する真諦と玄奘の漢訳、また、窺基の『弁中辺論述記』と安慧の *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (MAVT) とにおける虚妄分別の註釈部分を検討する。

2-1. 真諦訳と『弁中辺論述記』における虚妄分別解釈

MAVBh において世親は MAV 1-1a の 虚妄分別 (abhūtaparikalpa) を 所取能取分別 (grāhyagrāhakavikalpa) と言い換えて註釈している⁽⁶⁾。即ち、虚妄分別を虚妄と分別とに分け、そのうち虚妄 (abhūta) を所取能取 (grāhyagrāhaka) に、分別 (parikalpa) を分別 (vikalpa) に対応させている。従って、虚妄分別における虚妄と分別との関係は所取能取と分別との関係に換言されると言える。

MAVBh の真諦訳では、この箇所が「虚妄分別者。謂分別能執所執。」⁽⁷⁾と訳されている。語順上、この文章は能執所執が分別の後ろに位置しているから、「虚妄分別とは能執と所執とを分別することである」との意味で理解することができる。即ち、真諦は所執能執分別を同格限定複合語ではなく所執能執が分別の対象になる関係を形成する格限定複合語として読んでいたのである。

一方、玄奘はこの文章を「虚妄分別有者。謂有所取能取分別。」⁽⁸⁾と訳して grāhyagrāhakavikalpa をそのまま翻訳している。この訳では所取能取と分別との関係が直接的に現れていない。しかし、これに対する窺基の註釈を見れば、玄奘も真諦と同様に grāhyagrāhakavikalpa を格限定複合語と理解していたということがわかる。窺基は次のように註釈する。

『弁中辺論述記』[T44, 2b8-14]

論曰。虚妄分別有者至能取分別。(＝論曰。虚妄分別有者。謂有所取能取分別。)

述曰。此中一段皆始牒文而後申義。能取所取遍計所執縁此分別乃是依他。以是能縁非所執故。非全無自性。故名爲有。即所取能取之分別。依士釋名。非二取即分別持業。立號然此但約染分説妄分別有即依他。非依他中唯妄分別。有淨分別爲依他故。

論に言う。虚妄分別はあるということは、乃至、能取の分別がある

註釈して言う。その中この部分すべてはまず文章を表し、後に意味を解説する。能取所取は遍計所執〔性〕であり、これを縁じた分別は、即ち、依他〔起性〕である。これは能縁であつて所執ではないから、全く自性がないのではない。それ故に〔虚妄分別は〕有であると言われる。即ち、所取能取の分別であつて依士釈である。二取が、即ち、分別である持業〔釈〕ではない。〔このように〕名称を立てるが、これはただ染分に基いて妄分別は有であり、依他〔起性〕であると説くのである。依他〔起性〕には妄分別のみあるのではない。淨分別もあつて依他〔起性〕となる。

窺基は「所取能取分別」が依士釈（格限定複合語）であつて、所取能取が即ち分別を意味する持業釈（同格限定複合語）ではないと註釈する。そして、このような複合語解釈の根拠は、「所取・能取は遍計所執〔性〕であり、これを縁じた分別は、即ち、依他〔起性〕である」という一文で窺われる。即ち、所取・能取の二取と分別とは三性の観点で区別されるものである。それゆゑに、「所取能取分別」は同格関係の同格限定複合語にはならない。もし「所取能取分別」が同格限定複合語であれば、依他起性である分別が遍計所執性である所取能取と同一なものになり、虚妄分別が有であると言えないようになってしまふ。したがつて、窺基の註釈に従えば、「所取能取分別」は同格限定複合語ではない。

また、上記の引用文の中で「所取能取は遍計所執〔性〕であり、これを縁じた分別は、即ち、依他〔起性〕である」との説示から分別は所取能取を自らの対象としているのがわかる。それゆゑに、窺基の註釈に依拠すれば、所取能取と分別との間には前者が後者の対象となる関係が形成されていると言える。

以上のことから、虚妄分別の言い換えである所取能取分別が格限定複合語であるから、虚妄分別も格限定複合語でなければならないということがわかる。また、真諦訳と窺基の註釈によると所取能取と分別との間には前者が後者の対象になる関係が形成されているから、虚妄と分別の間にも前者が後者の対象になる関係が形成されていることがわかる。

2-2. Madhyāntavibhāgaṭīkā における虚妄分別解釈

安慧は MAVT において虚妄分別を註釈する際に、まず虚妄分別を全体的に説明し、それから虚妄分別を虚妄 (abhūta) と分別 (parikalpa) とに分けて各々説明する。

虚妄分別を分けずに全体的に説明する部分は次のようである。

MAVṬ (Y) [13, 18-19]

abhūtam asmin dvayaṃ parikalpyate anena vety abhūtaparikalpaḥ |

それにおいて、或は、それによって虚妄なる二つが分別されるから「虚妄分別」である。

ここで「虚妄」は「二つ」を修飾する形容詞として登場しており、「分別」は「分別される」(parikalpyate) という動詞として登場している。「虚妄」が「二つ」、即ち、所取能取にかかっていることは、虚妄分別という複合語の中で、「虚妄」は「分別」にかかる形容詞ではないということを示す。従って、虚妄分別は虚妄なる分別とならない。虚妄なるものは所取能取の二取だからである。

次に「分別」が動詞として登場しているということは「分別」はある働きを持つものだということを意味する。そして「分別」は「分別される」という受け身の形で表現されているから、この文章の中でその働きを受けているもの、つまり、働きの対象となるものはこの文章の主語である虚妄なる二つだということがわかる。また、虚妄なる二つは虚妄分別において、或は、虚妄分別によって分別されるから「分別」という働きの主体は虚妄分別であるということもわかる⁽⁹⁾。

従って、この場合、虚妄分別を虚妄なる分別という同格限定複合語と読むことはできない。虚妄は二取を指しているからであり、その虚妄なる二取は分別の対象となっているからである。

次に、安慧は虚妄分別を虚妄 (abhūta) と分別 (parikalpa) とに分けて次のように一つずつ説明している。

MAVṬ (Y) [13, 19-22]

abhūtavacanena ca yathāyaṃ parikalpyate grāhyagrāhakatvena tathā nāstīti pradarśayati | parikalpavacanena tv artho yathā parikalpyate tathārtho na vidyata iti pradarśayati |

「虚妄」と言う語によって、それが所取・能取として分別されるように、そのように存在しないということが示される。一方「分別」と言う語によって、対象が分別されるように、そのように対象は存在しないということが示される。

まず「虚妄」の部分からみると、所取・能取の二取は分別されるものとして登場している。さらに、その分別されるもの、二取は分別されるそのようには存在しないものとして説かれている。そして、このような二取の存在の状態、即ち、分別されるもののようには存在しないということが「虚妄」が意味する所となっている。従って、このような安慧の註釈にもとづけば、

「虚妄」というのは二取が持つ存在の状態を形容する語であるから、「虚妄」は二取を修飾するものだということがわかる。「分別される」(parikalpyate)と登場している「分別」(parikalpa)にかかるものではないのである。

次に「分別」の部分を見ると、「分別」は「分別される」という動詞の形で言い換えられて登場している。そして、その分別されるものは、分別されるようには存在しないものとして記述されている。従って、「分別」とは存在しないものを分別すること、存在しないものを対象とすることである。そして、この「分別」が自分の対象とするものは、分別されるように存在しないもの、即ち、虚妄なるものである。それゆえに、このような安慧の「分別」の註釈に依拠すれば、「虚妄」は分別の対象に関係するということがわかる。「分別」に直接的に関係するのではないのである。

以上、安慧の虚妄分別に対する二つの註釈を分析してみた。その結果、虚妄は二取にかかる修飾語だということと、その虚妄なる二取は分別されるもの、分別の対象になるものだということが導き出された。従って、安慧の註釈によれば虚妄分別は同格限定複合語ではなく、虚妄なる二取(abhūta)が分別(parikalpa)の対象となっている格限定複合語であると言える⁽¹⁰⁾。

MAVBhに対する二種の漢訳と窺基の註釈書、そして MAVT に記述されている内容を分析してみた結果、虚妄分別は同格限定複合語ではないということが明らかになった。以上の文献に限っては、虚妄は二取を形容するものであり、虚妄によって形容される二取は分別の対象になるものである。従って、この場合、虚妄分別は「虚妄なるもの(二取)を分別すること」、或は、「虚妄なるもの(二取)に対する分別」という意味の格限定複合語だということが導き出される。

また、これに加えて、虚妄分別というものは、虚妄なるもの、即ち、実在しないものを作り出す機能をもつものだということが明らかになった。分別の対象は実在しない虚妄なるものであり、その虚妄なるものは分別されるものである。そして、分別されるものとは実在しないのに実在するように分別されるものである。それゆえに、分別とは実在しないものを実在するように作り出す機能を有すると言える。したがって、虚妄分別は実在しないものを作り出す機能を持つものだということが、虚妄分別は格限定複合語だということと共に導き出される⁽¹¹⁾。

3. 同格限定複合語(karmadhāraya)としての虚妄分別

虚妄分別という用語は Mahāyānasūtrāṣaṅgīkā (MSA) と Vimśatikā (VŚ) とにも登場する。そしてその各々の註釈書である Sūtrāṣaṅgīkāraṇīyā (SAVBh) と Prakaraṇavimśatikāṭīkā (PvT) には虚妄分別という複合語の構造を知り得る文章が見受けられる。以下、各々の文献に登場する虚妄分別が MAV における虚妄分別と同一なものでありながら、同格限定複合語として解釈されていることを分析する。

3-1. MSA における虚妄分別解釈

MSA において虚妄分別が登場する数々の箇所の中で、虚妄分別という複合語の構造を知り得る箇所は一切所知を論じる部分、SAVBh の註釈によると世間法と出世間法とを論じる部分である。

MSA [62, 20 - 63, 1]

abhūtakalpo na bhūto nābhūto 'kalpa eva ca |

na kalpo nāpi cākalpaḥ sarvaṃ jñeyaṃ nirucyate || 31 ||

abhūtakalpo yo na lokottarajñānānukūlaḥ kalpaḥ | na bhūto nābhūto yas tadanu-
kūlo yāvan nirvedhabhāgiyaḥ | akalpas tathatā lokottaraṃ ca jñānaṃ | na kalpo nāpi
cākalpo lokottaraṃ prapñālabdhaṃ laukikaṃ jñānaṃ | etāvac ca sarvaṃ jñeyaṃ |

虚妄分別と虚妄で虚妄でもない〔分別〕と無〔分別〕と

分別でなく無分別でもないものが一切の所知だと説かれた。

「虚妄分別」とは、出世間智に随順しない分別である。「虚妄で、虚妄でもない」とは、それに随順するもの、乃至順決擇分〔の分別〕である。「無分別」とは、真如と出世間智である。「分別でなく、無分別でもない」とは、出世間智の後に得られた世間智である。「一切の所知」はこれだけである。

ここにおいて虚妄分別は一切所知を虚妄と分別との有無を基準として分類する脈絡で、虚妄と分別を皆備えているものとして定められており、出世間無分別智と出世間後所得清浄世間智との関係で捉えられている。これに対する SAVBh の註釈は次のようである。

SAVBh [92, 1-93, 4]

shes bya'i yongs su tshol ba'i tshigs su bcad pa ste zhes bya ba la/ shes bya'i rnam pa
gnyis te/ 'jig rten gyi chos dang 'jig rten las 'das pa'i chos te/ chos gang dag ni 'jig rten
gyi chos/ chos gang dag ni 'jig rten las 'das pa'i chos yin pa brtags pa la tshigs su bcad
pa kyis bstan to zhes bya ba'i don to//

yang dag min rtog zhes bya ba la/ yang dag pa ma yin la kun du rtog pa ni gang chos
kyi dbyings dang rnam par mi rtog pa'i ye shes 'thob pa dang rjes su mthun ba ma yin
pa'i rtog pa ste/ 'dod pa'i khams nas srid pa'i rtse mo man chad kyi sems can rnams
kyi gzung ba dang 'dzin par kun du rtog pa ni yang dag pa ma yin par kun du rtog pa
zhes bya'o/

yang dag min yang yang dag min/ /zhes bya ba la/ yang dag pa yang ma yin yang dag
pa ma yin pa yang ma yin pa'i rtog pa ni so so'i skye bo'i dus na dam pa'i chos nyan

pa dang sems pa la sogs pa nas brtsams te mos pa spyod pa'i sa 'jig rten gyi chos mchog
man chad kyī rtog pa la bya ste/ de'i tshe na gzung ba dang 'dzin pa'i rtog pa yod pas
na yang dag pa ma yin pa zhes bya'o/ /chos kyī dbyings dang 'jig rten las 'das pa'i ye
shes rtogs par bya ba dang rjes su mthun zhing de'i rgyu lta bur gnas pas na yang dag
pa ma yin pa yang ma yin pa zhes bya'o/ /

mi rtog ces bya ba la mi rtog pa ni chos kyī dbyings de bzhin nyid dang / 'jig rten las
'das pa'i ye shes rnam par mi rtog pa'i ye shes la bya ste/ ci'i phyir zhe na/ de gnyis
la/ gzung ba dang 'dzin pa la sogs pa'i rtog pa med bas na mi rtog pa zhes bya'o/ /
rtog min mi rtog pa ma yin/ /zhes bya ba la/ rtog pa yang ma yin mi rtog pa yang ma
yin pa ni rnam par mi rtog pa'i rjes las thob pa'i dag pa'i 'jig rten pa'i ye shes la bya
ste/ ye shes de la gzung ba dang 'dzin pa lta bur rtog ba med pas na mi rtog pa zhes
bya ste/ ci'i phyir zhe na/ rnam par mi rtog pa'i ye shes kyis ni chos kyī dbyings la
dmigs te/ rnam par mi rtog pa'i ye shes la ni dag pa'i 'jig rten pa'i ye shes kyis dmigs
pas na gzung 'dzin du rtog pa med do/ /mi rtog pa yang ma yin pa ni chos rnams kyī
rang dang spyi'i mtshan nyid ni chos thams cad la sgyu ma dang smig rgyu lta bur rtog
pa yod pa'i phyir/

thams cad shes par bya ste brjod/ /ces bya ba la/ bzhi po 'di thams cad ni shes par bya
ba'i yul yin zhes brjod de/ shes par bya ba yang de tsam las lhag pa med pa'i phyir ro/ /
de yang dag pa ma yin par shes par bya'o/ /

「所知を求める偈頌」というのは、所知の種類は二つである。世間法と出世間法である。
或る法が世間法であり、或る法が出世間法であるかを区別することに対して、偈は説明す
るという意味である。

「虚妄分別」とは、虚妄であり、分別であるものは法界と無分別智とを得ることに随順す
るものではない分別である。〔すなわち〕欲界から有頂(srid pa'i rtse mo, *bhāvāgra)ま
での有情たちが所取・能取を分別することが虚妄分別ということである。

「虚妄で、虚妄でもない」とは、虚妄で、虚妄でもない分別は異生の時に、清浄な法に対
する聞と思等から始めて、信解行地(mos pa spyod pa'i sa, *adhimuktīcaryābhūmi)と世
第一法('jig rten gyi chos mchog, *laukikāgradharma)までの分別を言う。そのときに、
所取・能取の分別が存在する場合、「虚妄で」という。法界と出世間智とを分別すること
(rtogs par bya ba)に随順しながら、その原因のようにとどまる場合、「虚妄でもない」
と言う。

「無分別」とは、無分別は真如法界と出世間無分別智という智とを言う。なぜか。その二
つに所取・能取等の分別がない場合「無分別」という。

「分別でなく、無分別でもない」とは、分別でなく無分別でもないは、無分別の後に得

られた清浄な世間智を言う。その智慧に所取・能取のような分別が無いことに依る場合、「無分別」という。なぜか。無分別智が法界を所縁とし、無分別智を清浄な世間智が所縁とする場合、所取・能取を分別することがないからである。「無分別でもない」とは、諸法の自共相が、一切法において、幻と幻影のように、分別は存在するからである。「一切の所知だと説かれた」とは、この四つの「一切」が「所知」の対象であると「説かれた」。この所知以外にはないからである。それ（此の四つ）は虚妄であると知るべきである。

以上の引用文から見れば、虚妄分別は無分別智に随順しないもの、無分別智に反するものであって、修行体系からみれば結局否定されるべきものとして設定されている。そして虚妄分別は「所取と能取とを分別すること」と説明されているから、ここにおける虚妄分別は MAV の虚妄分別と同一なものである。しかし、SAVBh ではそれを「虚妄であり、分別である」と分解して書いているから、この場合の虚妄分別は同格限定複合語である。したがって、SAVBh では MAVṬ と異なる複合語の解釈を見せていると言える。

3-2. VŚ における虚妄分別解釈

VŚ において虚妄分別は世親が有情の認識は夢での認識と異ならないということを主張する部分で発見される。該当部分を引用すると次のようである。

VŚ [9,11-16]

idam ajñāpakam | yasmāt |

svapnadṛgviśayābhāvaṃ nāprabuddho 'vagacchati || 17 ||

evaṃ vitathavikalpābhyāsavāsanānidrayā prasupto lokaḥ svapna ivābhūtam arthaṃ paśyan na prabuddhas tadabhāvaṃ yathāvaṃ nāvagacchati | yadā tu tatpratipakṣalokottaranirvikalpajñānalābhāt prabuddho bhavati tadā tat prṣṭhalabdhaśuddhalaaukikajñānaśaṃmukhibhāvād viśayābhāvaṃ yathāvad avagacchatīti samānam etat |

これは論拠にならない。なぜならば、

夢で見る対象が存在しないということを目覚めていない者は悟らない。

このように、虚妄分別を繰り返すことによる習氣という睡眠によって眠っている世間〔人〕は、夢においてのように、実在しない対象を見るが、目覚めた人はそれが実在しないということを如実に悟らないのではない。しかし、それを對治する出世間無分別智を得ることによって目覚めるようになるとき、その後に得られた清浄な世間智が現前するようになることから、対象が存在しないことを如実に悟る。それ故に、それは〔夢での対象

と] 等しいのである。

ここで注目されることは、VŚ における虚妄分別は MAV と MSA とは違って、abhūtaparikalpa ではない vitathavikalpa として登場していることである⁽¹²⁾。しかし真諦と玄奘との漢訳では vitathavikalpa が MAV での abhūtaparikalpa と同一に、虚妄分別と訳されている⁽¹³⁾。このように VŚ において虚妄分別は vitathavikalpa という単語で表記されているが、次の三つの点から見れば vitathavikalpa は abhūtaparikalpa と同一なものだといえることができる。

第一は MAV での abhūtaparikalpa が実在しない対象を造り出す機能を持っているように、VŚ の vitathavikalpa も実在しない対象を造り出す機能を持っているものとして記述されている点である。それは vitathavikalpa が睡眠と譬喩され、実在しない対象は夢での対象と譬喩されていることからわかる。睡眠によって夢を見るように、vitathavikalpa によって実在しない対象を見るのである。それ故に vitathavikalpa は実在しない対象の原因であって、実在しない対象を造り出す機能を持っているとすることができる。

第二は VŚ の vitathavikalpa は MSA の abhūtaparikalpa と同一の脈絡で、同一の意味のものとして取り扱われている点である。VŚ で vitathavikalpa は MSA の abhūtaparikalpa と同一に出世間無分別智と出世間後所得清浄世間智との関係で記述されている。そして MSA の abhūtaparikalpa が無分別智に反するもの、修行体系で結局否定されるべきものとして理解されているように、VŚ での vitathavikalpa も出世間無分別智によって対治されるもの、対象を如実に見るためには否定されるべきものとして理解されている。それ故に VŚ の vitathavikalpa は、修行体系での脈絡で、MSA の abhūtaparikalpa と同一の意味のものと見なされていると言える。

第三は MAV と MSA との abhūtaparikalpa が所取・能取の二取分別と同一のものとして言い換えられているように、vitathavikalpa も二取分別を意味するものとして考えられている点である。PvṬ では VŚ のこの部分を次のように註釈している。

PvṬ (D) [191a6-191b4]

gzugs la sogs pa byis pa'i skye bos yongs su brtags pa dag ni 'jig rten las 'das pa'i ye shes kyi yul ma yin te/ gang dag de'i yul gyi dngos por ma gyur pa de dag gi rtog pa'i shes pa dag pa 'jig rten pa zhes bya ba rnams kyis sel to/ /de bas na de ni mtshungs so/ /

'jig rten las 'das pa rnam par mi rtog pa'i ye shes thob ces bya ba ni 'jig rten dang mi mthun pas 'jig rten las 'das pa'o/ /gzung ba dang 'dzin pa'i rnam par rtog pa med pa'i phyir rnam par mi rtog pa'o/ /

de'i rjes las thob pa dag pa 'jig rten pa'i ye shes mngon du gyur zhes bya ba na⁽¹⁴⁾ de'i rjes las thob pa ste/ de zhes bya ba ni 'jig rten las 'das pa'i ye shes dang sbyar ro/ / rjes zhes bya ba ni stobs la bya'o/ /de ni de'i rjes las thob pa yang yin la dag pa 'jig rten pa'i ye shes kyang yin no zhes bsdu'o/ /

gzung ba dang 'dzin par mngon par zhen pa'i bag chags spangs pa'i phyir dag pa'o/ / mngon par zhen pa med kyang gzung ba dang 'dzin pa'i rnam par 'byung bas 'jig rten pa'o/ /

'dir de'i spyi'i don ni spros pa'i bag chags nang na gnas pa yongs su smin pa'i dbang gis gzugs la sogs pa'i don snang pa'i shes pa rnams 'khor ba'i gnas su 'jug ste/ gang gi tshe 'jig rten las 'das pa'i ye shes kyis bag chags de dag spangs par gyur pa de'i tshe dag pa 'jig rten pa'i ye shes byung nas yul med par rtogs so/ /

愚かな者によって遍計執された色等は出世間智の対象ではない。それ(出世間智)の対象としての存在とならないそれら(遍計執された色等)の分別智は清浄な世間〔智〕というものによって除去される。それ故に「それは〔夢と〕等しいのである」。

「出世間無分別智を得る」ということは、世間と等しくないから「出世間」である。所取・能取の分別がないから「無分別」である。

「その後に得られた清浄な世間智が現前するようになる」ということはその後に得られるのであって、「それ」というのは、出世間智にかかる。「後」というのは力である。それ(出世間後所得清浄世間智)はそれ(出世間智)の後に得られるものであり、清浄な世間智でもあるというように〔この複合語は〕構成されている。

所取・能取を貪着することの習氣が除去されたから「清浄」である。貪着することはないけれども、所取・能取の行相として起こるから「世間」である。

ここにおける要義は、内に留まって構想する(spros pa)習氣が成熟する力によって、色等の対象として顕現する智が輪廻の所依として設定される〔ということである〕。出世間智によってその習氣が除去されたそのとき、清浄な世間智が生じて対象が存在しないことを了解する。

ここにおいて vitathavikalpa は清浄な世間智によって除去される世間智として記述されている。そして出世間無分別智は世間と等しくなく所取・能取の分別がないものとして、出世間後所得清浄世間智は所取・能取の行相として起こるが、所取・能取を貪着することの習氣は除去されているものとして註釈されている。つまり、vitathavikalpa の反対概念である無分別には所取・能取の分別がないということであり、vitathavikalpa と同様に世間智に属する出世間後所得清浄世間智には所取・能取に対する貪着はないが、所取・能取の行相はあるという

ことである。

以上のことから見れば、世間智としての vitathavikalpa は、無分別智と比較すれば、所取・能取の分別があるものであり、出世間後所得清浄世間智と比較すれば、所取・能取の行相と所取・能取に対する貪着とも持っているものである。それ故に abhūtaparikalpa が二取分別と言い換えられるように、vitathavikalpa も二取分別を意味するものであるとすることができる。

以上の三つの点から VŚ の vitathavikalpa は MAV・MSA の abhūtaparikalpa と別なものではないということが導き出された⁽¹⁵⁾。次に、このような意味の vitathavikalpa が同格限定複合語として解釈されているのは、この複合語に対する PvṬ の註釈から確認できる。

PvṬ (D) [191a2-a4]

de ni log pa yang yin la rnam par rtog pa yang yin no zhes bsdu'o/ ⁽¹⁶⁾de la goms pa ni log par rnam par rtog pa la goms pa ste/ yang dang yang mngon du gyur pa ni goms pa zhes bya'o/ /log par rnam par rtog pa de las byung ba'i bag chags gang yin pa de la de skad ces bya'o/ /gnyid dang 'dra ba'i bag chags rnam pa de lta bu de la gnyid ces bya'o/ /

それは虚妄でもあり、分別でもあると〔この複合語は〕構成されている。それに対して「繰り返すこと」が「虚妄分別を繰り返す」である。常に現前することを「繰り返すこと」と言う。その虚妄分別から起こる「習氣」、それ(習氣)に対してこのように言うのである。睡のような「習氣」、そのようにそれ(習氣)に対して「睡眠」と言う。

vitathavikalpa は「虚妄分別を繰り返すことによる習氣という睡眠によって (vitathavikalpābhyāsavāsanānidrayā)」という複合語を分析する部分で、「虚妄でもあり、分別でもある」という形で分解されている。それ故に VŚ において使われている虚妄分別 (vitathavikalpa) は PvṬ による場合、同格限定複合語である。

以上 MSA と VŚ とにおいて登場している虚妄分別を SAVBh と PvṬ との註釈内容に基づいて考察した。その結果、MSA と VŚ とでは虚妄分別を同格限定複合語として解釈している箇所が登場しているということと、VŚ では虚妄分別が abhūtaparikalpa ではなく vitathavikalpa と表現されているということが確認された。

4. 結論

MAV と MSA と VŚ とで登場している虚妄分別をその複合語解釈に焦点を当てて検討した。その結果、虚妄分別には二つの表現様式があるということと、その複合語の解釈において

も二つの傾向があるということが確認された。すなわち、虚妄分別は MAV と MSA とにおいては *abhūtaparikalpa* として、VŚ においては *vitathavikalpa* として表記されている。それゆえに虚妄分別には *abhūtaparikalpa* と *vitathavikalpa* という二つの表現様式があると言える。そして、虚妄分別の複合語に対しては、MAV では格限定複合語として解釈されているが、MSA と VŚ とでは同格限定複合語として解釈されている。このように格限定複合語と同格限定複合語という二つの解釈を支持する文献的な根拠が各々発見されたので、虚妄分別という複合語には二つの解釈傾向があると言える。以上のように、虚妄分別という複合語には二つの表現様式と、二つの解釈傾向があるということがいえよう。

〔略号〕

VŚ : *Vijñaptimātratāsiddhi deux traités de Vasubandhu: Viṃśatikā et Trīṃśikā*, ed. by Sylvain Lévi. paris, 1925

VŚ (D) : *Nyi shu pa'i 'grel pa ; sDe dge edition of Viṃśatikā* (Vasubandhu ; dbyig gnyen), D No. 4057, shi 4a3-10a2.

PvṬ (D) : *Rab tu byed pa nyi shu pa'i 'grel bshad ; sDe dge edition of Prakaraṇaviṃśatikāṭikā* (Vinītadeva ; Dul ba'i lha), D No. 4065, shi, 171b7-195b5.

PvṬ (P) : *Rab tu byed pa nyi shu pa'i 'grel bshad ; Peking edition of Prakaraṇaviṃśatikāṭikā* (Vinītadeva ; Dul ba'i lha), P No. 5566, si, 201b8-232a8.

MAV : *Madhyāntavibhāga-kārikā* (Maitreya). See MAVBh(N).

MAVBh (N) : *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Vasubandhu), *Madhyāntavibhāga-bhāṣya: A Buddhist Philosophical Treatise*. Ed. Gadjin Nagao. Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1964.

MAVṬ (Y) : *Madhyāntavibhāga-ṭikā* (Sthiramati), *Madhyāntavibhāgaṭikā: Exposition systématique du yogācāravijñaptivāda*. Ed. Susumu Yamaguchi. Nagoya: Hajinkaku, 1934. Repr., Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1966.

MSA : *Mahayana-Sutralamkara : expose de la doctrine du grand vehicule / Asanga ; edite et traduit Dapres un manuscrit rapporte du Nepal par Sylvain Levi, Tome I Texte, Bibliotheque de l'etude des hautes etudes, Shanghai, 1940.*

SAVBh: *Sūtrālamkāravṛttibhāṣya*, ed. by Osamu Hayashima, Chos yongs su tshol ba'i skabs or Dharmaparyeṣṭy adhikāra the XIth Chapter of the Sūtrālamkāravṛttibhāṣya, Subcommentary on the Māhāyānasūtrālamkāra Part II, 『長崎大学教育学部人文科学研究報告』27, pp. 73-119, 1978.

TrṬ (D) : *Sum cu pa'i 'grel bshad ; sDe dge edition of Trīṃśikāṭikā* (Vinītadeva ; Dul ba'i lha), D No. 4070, hi, 1b1-63a7.

『大乘唯識論』（大正 No. 1589 天親造 眞諦訳）in Vol. 31

『唯識二十論』 (大正 No. 1590 世親造 玄奘訳) in Vol. 31

『摂大乘論釈』 (大正 No. 1595 世親造 眞諦訳) in Vol. 31

『中辺分別論』 (大正 No. 1599 天親造 眞諦訳) in Vol. 31

『弁中辺論』 (大正 No. 1600 世親造 玄奘訳) in Vol. 31

『弁中辺論述記』 (大正 No. 1835 窺基造) in Vol. 44

〔参考文献〕

伊藤康裕

2010 「安慧の唯識説の一考察-虚妄分別と二取との関係を中心に」, 『東洋の思想と宗教』 27, pp. 46-63.

長尾雅人

1937 「空義より三性説へ」 『哲学研究』 250, pp. 61-96.

1952 「転換の論理」, 『哲学研究』 405号, pp. 449-476.

1967 「唯識義の基盤としての三性説」, 『鈴木学術財団研究年報』, 4号, pp. 1-22.

1968 「余れるもの」, 『印度学仏教学研究』 16-2号. pp. 23-27.

1976 「中辺分別論」, 『大乘仏典15: 世親論集』, 中央公論社.

1982 『摂大乘論 -和訳と注解: 上巻-』, 講談社.

山口益, 野澤静證

1953 『世親唯識の原典解明』, 法蔵館

横山紘一

1971 「五思想よりみた彌勒の著作-特に『瑜伽論』の著者について-」

Mario D'Amato

2012 *Maitreya's Distinguishing the middle from the extremes (Madhyāntavibhāga) along with Vasubandhu's commentary (Madhyāntavibhāga-bhāṣya) : a study and annotated translation*, New York : American Institute of Buddhist Studies.

Th. Stcherbasky

1977 *Madhyānta-vibhāga Discourse on Discrimination between Middle and Extremes ascribed to Bodhisattva Maitreya and commented by Vasubandhu and Sthiramati* ; Bibliotheca Buddhica 30 ; Neudruck der Ausgabe, 1936 ; repr. Tokyo : Meicho-Fukyu-kai.

〔注〕

- (1) 長尾雅人の MAVBh の和訳 (長尾 [1976])。また、長尾 [1937 : p. 79] の「虚妄とは真実有 (bhūta) ならざること、所謂そらごとであり、分別がかく虚妄なりとせらるる點に就いては、」、長尾 [1967 : p. 1] の「もちろんこの「虚妄」と形容せられた「分別」は、単なる感覚よりは進んだ段階にある分別であり、思惟や判断も含んでいる」、長尾 [1988 : p. 6] の「虚

- 妄という形容詞が冠せられているが、「虚妄なる分別」は識と全く同義に扱われる」の記述から虚妄（abhūta）が分別（parikalpa）に直接的にかかる形容詞として理解されているということが確認される。
- (2) 第一の根拠は長尾雅人 [1967 : p. 15, 1968 : p. 23] で、第二の根拠は長尾雅人 [1952 : .462] で論じられている。そして、長尾雅人 [1982 : p. 280 脚注 1] では、この二つの根拠がともに論じられている。
- (3) Th. Stcherbasky [1977 : p. 16, NOTES p. 11].
- (4) Mario D'Amato [2012 : p. 117 脚注 1]. Mario D'Amato が提示している安慧の註釈は MAVṬ (Y) [13, 18-19] である。
- (5) 横山紘一 [1971 : p. 30] 参照。
- (6) MAVBh (N) 18, 1.
- (7) 『中辺分別論』 T31, 451a18.
- (8) 『弁中辺論』 T31, 464b18.
- (9) 前の引用文での asmin、anena が何を指す代名詞であるかに関しては、以下の、MAVṬ (Y) において空性の無という特徴を註釈する部分で確認できる。dvayasya grāhyasya grāhakasya ca abhūtaparikalpe 'bhūtaparikalpena vā parikalpitātmakatvād vasturūpeṇābhāvaḥ | （「所取・能取の二つは」虚妄分別において、或は、虚妄分別によって分別された本質のものである、実在の在り方として「無」である）。
- (10) ここで引用した MAVṬ の箇所は既に伊藤 [2010] において分析されている。伊藤 [2010] はこの MAVṬ の箇所だけでなく安慧が挙げている幻術の喩例、そして、これと同一の喩例が登場する MSA とそれに対する世親と安慧との註釈とを分析して、虚妄分別と虚妄なるものである二取との間には因果関係が成立するということを論証した。ただ、虚妄分別がどのような種類の複合語であるかに関しては直接的に言及していない。ちなみに、虚妄分別という複合語で、虚妄を果、分別を因と解釈することは真諦訳『摂大乘論釈』の増広部分（T31, 181b28-c01）でも窺われる。
- (11) VŚ の第十偈の kalpitātmanā を説明する散文部での parikalpita (Tib. kun brtags pa) を sgro btags pa (Skt. adhyāropita 増益) と言い変えて表記している。

PvṬ (D) [184a4-6]

brtags pa'i ngo bo de la yang ji lta bu snyam pa la gang byis pa rnams kyis zhes bya ba la sogs pa smos so/ / gang so so'i skye bo rnams kyis chos rnams la gzung ba dang 'dzin pa'i mtshan nyid kyi ngo bo nyid du sgro btags pa ni gzung ba dang 'dzin pa'i mtshan nyid du sgro btags pa'i bdag nyid des de dag bdag med kyi/ sangs rgyas rnams kyi yul brjod du med pa gang yin pa yang med pa ni ma yin no/ /

その分別された体に対して何であるかと思っている人に対して、「愚かな者たちは」云々という。諸凡夫たちによって諸法に対して所取・能取の相の体性として増益されたものは、

「その」所取・能取の相として増益された本質と言う点で、「それらは無我であるが、」諸
「佛の対象である言語を離れているもの、それが無であるのではない」。

それ故に虚妄分別の分別というものは存在しないものを存在するように見せる機能、実在しないものを造り出す機能を有するものである。

- (12) VŚ (D) 8b4. においても虚妄分別は abhūtaparikalpa の訳語である yang dag pa ma yin pa kun tu rtog pa ではない log par rnam par rtog pa と訳されている。
- (13) 『大乘唯識論』(T31, 73a20), 『唯識二十論』(T31, 76c10)。
- (14) Pvṭ (P) 226b4では ni となっている。Pvṭ (P) に従って読んだ。
- (15) abhūtaparikalpa と vitathavikalpa を構成する各単語間の同一性に対しては、まず parikalpa と vikalpa とは abhūtaparikalpa が grāhyagrāhakavikalpa と言い換えられていることから、また、Trṭ (D) 52b6-7での rnma par rtog pa zhes bya ba dang yongs su rtog pa zhes bya ba ni don gcig go/ /という文章からも確認できる。abhūta と vitatha との場合、abhūta は分別されたように存在しないという存在の状態を意味し、そのような状態のものである二取を指す表現として使われている(MAVṭ (Y) [13, 19-21])。そして今引用している VŚ の箇所ではないが、VŚ の第二十偈の散文部で登場している vitathapratibhāsa の vitatha を Pvṭ (D) [194b7] では 'di ltar de dag gi sems de ni gzung ba dang 'dzin pa'i rnam pas log pa'o/ /de ltar yang dag pa'i don du na de dag gi sems de ni gzung ba dang 'dzin pa dang bral ba yin na/ gnyis su med pa'i ngo bo'i sems la gnyis kyi rnam pa ni log pa yin no/ / (なぜならば彼らのその心は所取・能取の行相であるから「真実でない」のである。即ち、本来彼らのその心が所取・能取を離れているのに対して、二つとして無である本質の心に二つの行相が“真実でない”のである。)と註釈している。即ち、二取の行相、本来二取を有しない心に存在する二取の行相が vitatha と表現されているのである。abhūta と vitatha といずれも二取を指している。従って虚妄分別と漢訳される abhūtaparikalpa と vitathavikalpa とが同一な意味のものだということは、その複合語を構成している各々の単語の意味からも支持される。
- (16) Pvṭ (P) 226a5-6ではこの文章が de ni log pa yang ma yin la rnam par rtog pa yang ma yin no/ / zhes bsdu pa'o/ /となっている。しかし、この文章は VŚ を註釈する順番からみると、VŚ の vitathavikalpābhyāsavāsanānidrayā という複合語を分解しながら註釈する部分であると考えられる。『世親唯識の原典解明』p. 105,1ではこの文章を Pvṭ (P) に従って訳し、この文章の主語である「de」は prabuddha(醒めたる)を指していると見ている。しかし、そうする場合、その次の文章で又出てくる代名詞「de」は prabuddha を意味するようになる。そしてこの文章で「de」が prabuddha を意味するとすれば、prabuddha を「繰り返すこと」が虚妄分別を「繰り返すこと」になってしまう。また bsdu pa という動詞は先の引用文の出世間後所得清浄世間智という複合語を分析する部分でも使われている。従って、今のこの文章も複合語を分析する文章であるといえる。しかし prabuddha は複合語ではない。それ故に

「de」が指すのは「繰り返すこと」の対象となっている虚妄分別という複合語である。そして虚妄分別が「虚妄でもなく、分別でもない」と分解される場合は有り得ないから、この文章は $PvT(D)$ に従って読んだほうが正しいと思われる。

（きむ じゅんう 文学研究科仏教学専攻博士後期課程）

（指導教員：松田 和信 教授）

2016年 9 月30日受理